

Ch.11 Perceptions of desire –A hot-cold empathy gap perspective

Ruttan, R. L. and Nordgren L. F. (2015). Perceptions of desire –A hot-cold empathy gap perspective. In W. Hofmann and L. F. Nordgren (Eds). *The Psychology of Desire*, pp.225-243. Guilford Press.

発表者：小森めぐみ（四天王寺大学）

- ・ 欲求は快さや不快からの解放をもたらすような特定の対象、人、活動を欲する意識的な経験(Hofmann & Van Dillen, 2012)
- ・ 欲求は行動に大きな影響を及ぼすが、人々は欲求が自分たちの嗜好や行動に及ぼす影響についてほとんどわかっていない
 - 特に自分（や他人）がいま現在経験しているものとは違う欲求状態でどのようにふるまうのかを想像することは非常に難しい
- ・ 感情的に中立な”cold”状態のときには、感情的な”hot”状態になると自分がどうふるまうかをほとんどわかっていないし、欲求を抱いているときに、その”hot”状態が自分の行動に及ぼしている強いインパクトを過少視する (**hot-cold 共感ギャップ**)
 - Lynch & Bonnie (1994) 若者に対する喫煙関連の調査
 - ◇ 低頻度喫煙者の 85%、喫煙常習者の 70%が”自分が5年後は禁煙している”と回答
 - ⇒5年後の追跡調査で禁煙できていたのは、低頻度喫煙者の 58%、喫煙常習者の 13%
 - ◇ 若年喫煙者たちは「自分は喫煙習慣をつけることなく試しに喫煙している」と考えているが、それは誤りで、タバコが行動に及ぼす渴望の強さをわかっていない
- ・ 本章ではまず hot-cold 共感ギャップを定義したあとで、欲求に関連する様々な領域でこのバイアスが見られることを示した研究をあげる。その後共感ギャップの行動面でのインプリケーションと社会的判断・行動へのインプリケーションについて議論し、最後に共感ギャップ研究の今後の展望について述べる

Defining the empathy gap (p.226)

- ・ Hot-cold 共感ギャップの考え方を提唱したのは George Loewenstein(1996).
 - 自分と違う感情状態にある他者の反応を予測する際に経験(Loewenstein, 1996, 2000; Loewenstein, O'Donoghue, & Rabin, 2003; Loewenstein & Schkade, 1999; Van Boven & Loewenstein, 2005; Van Boven, Loewenstein, Dunning & Nordgren, 2013)
 - 自分自身の感情状態を過去や未来の決定に投影することから、共感ギャップは投影バイアスの一種と考えられている(Loewenstein et al., 2003)
- ・ 共感バイアスには hot-to-cold と cold- to-hot の二種類がある
 - **Cold- to-hot 共感ギャップ**：感情的な喚起のない cold なときに、喚起が高まっている hot な人の思考や行動を予測する際に生じる 例) 空腹でない減量者の予測
 - **Hot- to-cold 共感ギャップ**：感情的な喚起が高まっている hot なときに、cold な人の思考や行動を予測する際に生じる 例) 腹を立てながら下す意思決定、空腹時の買物

- ・ Cold-hot ギャップでは hot 状態の動機へのインパクトが過少視され、hot-cold では現在の状態が hot でなくなれば弱まることを忘れ去られる

Fisher & Rangel (2014)

- ◇ 空腹な参加者は満腹時にもらえるスナックに 20 セント高く、満腹な参加者は空腹時にもらえるスナックを 19 セント低く値づけした。

- ・ 共感ギャップは予測的/回顧的や対人間/個人内にも分類できる
 - **予測的共感ギャップ**：自分自身の将来の感情状態に対する思考や行動の予測で生起
 - ◇ 満腹時に魅力的な食べ物を避けられる見込みを高く考える
 - **回顧的共感ギャップ**：自分自身の過去の感情状態における思考や行動の想起で生起
 - ◇ 飲みすぎた翌日になんであんなことになったのかと思悩む
 - **対人間共感ギャップ**：他者の過去または未来の行動に関する決定で生起
 - **個人内共感ギャップ**：自分自身の過去または未来の行動に関する決定で生起
 - ◇ いとこは次の旅行で衝動買いの誘惑に耐えられるか、自分はどうか
 - ◇ 個人内ギャップは将来の予測に使われ、対人間ギャップは他者の評価に使われる

Explanations for the empathy gap (p.228)

- ・ 共感ギャップは単一のメカニズムをもつのではなく、複数の要因の影響を受ける
 - 感情が行動に及ぼす影響が包括的で大部分が非意識的であること (Berridge & Winkelman, 2003; Winkelman & Berridge, 2004; Zajonc, 2000)
 - ◇ 感情は心の働きのほぼ全般 (認知、注意、生理、知覚、記憶) に影響を与えるが、その影響は意識的な気づきが行われないままに生じる (Bechara, Damasio, Kimball & Damasio, 1997; Winkelman & Berridge, 2004)
 - 感情経験に関する記憶に限界があること (Robinson & Clore, 2002; Loewenstein, 1996; Nordgren, van der Pligt, & van Harreveld, 2006)
 - ◇ 人々は自分が感情を抱くに至った状況やその相対的な強さを思い出すことができるが、それがどんな感じだったかを思い出す (再経験する) ことはできない (Loewenstein, 1996; Robinson & Clore, 2002)
 - ◇ このことが、共感ギャップの克服を困難にしている (e.g., Eibach, Libby, & Gilovich, 2003)

Hot-cold empathy gaps and desire (p.228)

- ・ 共感ギャップが見られる領域として、薬物への渴望、空腹感、性的欲求、痛み、消費者の欲求、攻撃をあげる

薬物への渴望

- ・ 薬物への渴望は薬物依存の主要な原因である (Killen & Fortmann, 1997; Shiffman et al., 1997) が、人々は薬物への渴望に対して共感ギャップを示す。

Sayette, Loewenstein, Griffin, & Black (2008)

- ◇ 喫煙者をランダムに喫煙直後群と喫煙直前群に分け、それぞれで今後煙草にいくら支払ってもいいと思うかを質問し、あとで実際の支払額を調べた
- ◇ その結果、喫煙直後群の金額の見積もりは、実際の支払額よりも低かった

Giordano, Bickel, Loewenstein, Jacobs, Marsch, & Badger (2004)

- ◇ 鎮痛剤を受け取る直前または直後のヘロイン中毒者が、5日後の治療セッションに来たときに追加の鎮痛剤を受け取るか現金を受け取るかを選択
- ◇ 鎮痛剤を受け取る直前の渴望状態にある中毒者は5日後の鎮痛剤は\$60相当であると判断したが、受け取った直後の中毒者は\$35と判断した。

- ・ いずれの研究も、共感ギャップの二つの特徴を際立たせている
 - 共感ギャップがあつという間に生じること
 - ◇ 嗜好物を摂取してからほとんど時間がたっていないのに、渴望の影響を忘れた
 - 過去経験は共感ギャップを減らす役には立たないこと
 - ◇ いずれの参加者も常習者で、嗜好物と金銭のトレードオフ場面の経験も豊富
 - ◇ ヘロインの研究は3週間の間に8回意思決定（摂取前と後半々）を行ったが、両時点の判断が近づくことはなかった
 - ・ これらの知見は依存問題に2つの視点を提供する
 - 薬物の害が広く知られているのに、なぜそもそも人は薬物に手を出すのかという問題
 - ◇ 経験者ですら見通せないのだから、未経験者が渴望、依存について理解することは非常に難しい。
 - 依存を克服した人がなぜ時間がたつてからまた手を出してしまうのかという問題
- Nordgren, van Harreveld, & van der Pligt (2009)
- ◇ 依存を克服して症状がおさまると、渴望の強さは忘れ去られてしまい、自分の忍耐力が強くと見積もられてしまう

空腹感

- ・ 空腹感（特に高カロリーの）食品消費を動機づけ(Rolls, 1999)、衝動食いを促進する方向に注意、目標のアクセシビリティ、そして理性をゆがめる(Nordgren & Chou, 2011)
 - ・ 空腹感は健康管理やダイエットで強い影響を及ぼすが、その影響は過少視されやすい
 - 空腹が今の自分の意思決定に及ぼす影響を見通せない
- Nisbett & Kanouse (1969)
- ◇ スーパーに入る前のお客に、今どのくらいお腹が減っているかと、どれくらい買い物をするつもりかを尋ねた
 - ◇ レジで買い物量をチェックしたところ、空腹の客には計画外の買い物が多かった
- Gilbert, Gill & Wilson (2002)
- ◇ 空腹な参加者に、夕食を満腹食べた後にチョコレートケーキがどのくらい欲しいと思うかを尋ね、実際と比較した
 - ◇ 満腹後の参加者は空腹時の予測ほどにはチョコレートケーキを欲しがらなかった

- 満腹のときには、空腹時の食欲が及ぼす影響力を過少視する

Read & Van Leeuwen (1998)¹

- ◇ 空腹 or 満腹の参加者に1週間後の空腹時にもらうものとして健康的 or 不健康なお菓子を選ばせた。1週間後に受け取る際には、変更も認めた
- ◇ 満腹時にお菓子を選んだ参加者は、1週間後に健康→不健康に変更しやすかった

Nordgren et al., (2009)

- ◇ 空腹 or 満腹のダイエッターに(1)食欲をどの程度コントロールできるか(2)食べ物関連の誘惑の存在にどれくらい耐えられるかを尋ねた
- ◇ 空腹のダイエッターは自分が食欲をコントロールできる程度を高くみつもり、満腹のダイエッターは食品の誘惑に耐えられる程度を高く答えた

Nordgren, van der Pligt, & van Harreveld (2008)

- ◇ 経験豊かなダイエッターに空腹時 or 満腹時にこれから数週間の間にどの程度減量できるか、それにどれくらい自信があるかを答えた
- ◇ 満腹なダイエッターは減量に自信を示し、たくさん減量できると答えた

性的欲求

Empleten & Kok(2008) 高校生 400 名に対する性行動に関する調査

- ◇ オランダ人高校生に避妊の重要性評価や避妊意図、実際の避妊行動を尋ねた
- ◇ 結果、避妊の重要性評価や避妊意図と実際の避妊行動は無関連
- ◇ 若者たちは避妊行動を重視していても、「その瞬間」の性的欲求の影響力を過小に見積もってしまう

Loewenstein, Nagin & Paternoster (1997)

- ◇ 男性参加者に性的喚起の高まる写真（フルヌード） or 高まらない写真（ファッション誌）をランダム呈示
- ◇ その後参加者は、登場人物が恋人から性的に次の段階に進むことをやめてほしいと頼まれる内容の一人称のシナリオを完成させた
- ◇ 性的喚起が高まった参加者はそうでない参加者と比べて攻撃的な形の性行動を描いていた

Ariely & Loewenstein (2006)

- ◇ 性的喚起の高まった or 高まっていない男性参加者に性関連の判断課題を実施
 - 様々な対象（肥満女性、女兒、中年女性、男性、動物）の性的魅力の評価
 - 相手とセックスするために道徳的に問題のある行動（相手を酔わせる、愛していると嘘を言う）をとるかどうか
- ◇ 性的喚起が高まった参加者は広い範囲の対象の性的魅力を高く見積もり、道徳的に問題のある行動をとると答えやすく、避妊しないだろうと答えた

¹ Reference の論文タイトルが誤っている模様。該当するジャーナルにある論文のタイトルは Predicting Hunger: The Effects of Appetite and Delay on Choice

痛み

Read & Loewenstein (1999)

- ◇ 痛みに耐えることと引き替えにどの程度のお金をほしいかを質問
- ◇ 参加者は金額を決める前に痛みのサンプルを経験できたが、1/3の参加者は決定の1週間前に、1/3は直前に経験した。残り1/3はサンプルを経験しなかった
- ◇ 直前に痛みを経験した参加者の金額がもっとも高かった

Nordgren, van der Pligt, & van Harreveld (2006)

- ◇ 参加者は氷水に手をつけながら記憶課題に答えた後で、自分の記憶課題の成績に痛みやそれ以外の要因がどの程度影響したかを答えた。半数の参加者は評価をしているときに再度氷水を経験した。
- ◇ 氷水を再経験しないで評価した参加者は再経験した参加者と比べて痛みがパフォーマンスに及ぼした影響を小さく見積もった

- ・ さまざまな医学的判断において痛みを正しく見積もることは重要だが、患者は医学的処置の後にくる痛みを小さく見積もりがち

Christensen-Szalanski (1984)

- ◇ 麻酔なしでの出産を試みた妊婦の大多数が分娩室に入ると決定を翻す

Chochinov (1999)

- ◇ 末期ガンの患者の日常経験を測定したところ、日によって生きようとする意志には違いがあり、それはその日に経験する痛みと関連していた

- ・ 痛みに関しては対人間の共感ギャップも深刻
 - 医師たちが患者の痛みの深刻性を過小視することがくりかえし示されている (Hodgkins, Albert & Daltroy, 1985; Marquie et al., 2003; Pasero & McCaffery, 2001)

その他の領域

消費欲求

- ・ 消費者の欲求は物質的な製品を獲得しようとする渴望と定義できる(本書第20章)
- ・ 人々は自分が金銭的な誘惑に屈する程度を過小視(Banaji, Bazerman & Chugh, 2003)

Epley & Dunning (2000)

- ◇ 囚人のジレンマゲームを行う際に、参加者の84%が相手を負かすのではなく協力するだろうと予測するが、実際に協力するのは61%

- ・ 衝動買いでも共感ギャップが見られ、慢性的に衝動買いを行う人たちはその後で自尊心が下がり、抑うつに陥る(Black, 2007; Hassay & Smith, 1996)
 - 衝動買いを行った後ではそのときの衝動の強さを把握することができずに、自分の行動を傾向性から評価してしまうと考えられる

攻撃性

- ・ 人は害されると仕返ししたいという欲望を覚える(本書第18章)が、多くの攻撃行動は計算された復讐というより「かっとなって」生じる統制不能な怒りの結果と考えられている
- ・ こうした攻撃行動は共感ギャップの反映として考えられるかもしれない
 - 攻撃に関連する怒りが **hot state** であることは明白(e.g., Loewenstein, 1996)
 - さらに、攻撃欲求の影響力は強く、たとえ自分がそれによって害を被ることになっても相手に害をなそうとする(e.g., Fehr & Gächter, 2002; Xiao & Houser, 2005)
- ・ 怒りを感している最中に **hot-cold** 共感ギャップが生じて、自分がこれから先ずっと相手に対して敵意を抱くような気がしているために起きるのではないだろうか
Grimm & Mengel (2011)
 - ◇ 頭を冷やす時間があると仲直りの試みは成功しやすい
 - 冷静な状態にあるカップルは将来攻撃的にふるまおうとする欲求の強さを過小に見積もるために婚前契約などの安全策をとらず、後で大もめすることになる

Implications for behavior (p.235)

- ・ 欲求は人体にとって適応的な役割を果たしているが、その行動へのインパクトは人々の目標や意図の邪魔になりえる。共感ギャップの理解は自己統制の成功や評価の役に立つ

誘惑に耐える

- ・ 自己コントロールを必要とする誘惑の多くでは、**cold-to-hot** 共感ギャップが生じ、人々は自分が誘惑への欲求に耐えられると考えてしまっている

Nordgren and colleagues(2009) 自制バイアス(restraint bias)

- ◇ 衝動を統制できる程度を過大視するために、誘惑により多く身をさらす傾向
- ◇ 喫煙をやめた参加者に対し、自分がタバコへの渴望をどの程度コントロールでき、タバコの誘惑にどの程度耐えられるかを尋ね、4か月後に実際値を測定
- ◇ 煙草への渴望をコントロールできると答えていた参加者ほどタバコの誘惑に身をさらし、より多くのタバコの誘惑に身をさらしている者ほどまた喫煙していた
- 自制バイアスは特に構造化された介入を行う自己コントロールに役立つ
 - ◇ たとえば断酒会(AA)では、「最後の飲酒から離れるほど、次の飲酒に近くなる」と言われている(Seeburger, 1993, p.152)
 - ◇ こうしたプログラムでは自己効力感を高めることが重視されがちだが(Baer, Holt, & Lichtenstein, 1986)、非現実的なコントロール感がかえって自己統制を失敗させる(Nordgren et al., 2009)

目標設定

- ・ Hot-cold 共感ギャップは目標設定においても重要な役割を果たす
Nordgren et al., 2007
 - ◇ ダイエット経験のある者に今後どの程度減量できると思うかを予測させ、来週用の減量計画をたてさせた
 - ◇ 予測内容は予測の際の空腹感の影響を強く受け、空腹でない参加者の方が減量に自信を示し、自信を示した者ほど減量計画でシビアな目標をたてた
- ・ 矛盾したり、定義が貧弱だったりする目標は自己統制の失敗と関連する
Baumeister & Heatherton (1996)
 - ◇ 首尾一貫してははっきりとした定義をもった目標は
 - 明確な決定法則につながる(例. 9時半を過ぎたら食事しない)
 - 質の良い準備と計画を可能にする
 - ◇ 共感ギャップは減量目標を不安定にしてしまい、減量努力を台無しにする

Implications for social judgment (p.236)

- ・ 他人の欲求への反応について、判断を下さなくてはいけないこともある
 - (クスリを) やめられないようだったら別れる？なぜ彼女は浮気したの？薬物使用者は牢獄に行くべき？
 - このような意思決定を行う際に対人間の共感ギャップが顔を出し、欲求が他人の行動に及ぼす影響力が過少視されがち
- ・ 対人間の共感ギャップにおいて注視すべきなのは衝動的な行動のスティグマ化
 - 欲求のコントロールに失敗すると、それを甘え、意志の弱さ、不道德などに否定的に帰属する(e.g., Crisp & Gelder, 2000; Crocker & Major, 1989)。
- ・ 特に肥満のスティグマ問題は顕著
 - 肥満者は非肥満者と比べ稼ぎが少ない(男 24%、女 19%) (Maranto & Stenoien, 2000)
 - 肥満者の 54%は同僚から体型のことでスティグマ経験を持つ(Puhl & Brownell, 2006)
 - これらはすべて、肥満者は衝動に弱く怠け者で自制に欠けるというステレオタイプからのもの(Puhl & Latner, 2007)
- ・ 衝動的行動がスティグマ化されやすいのは共感ギャップのせい(Nordgren et al., 2007)
 - 渴望の影響力を過少視するために、それらの衝動をコントロール可能とってしまう
 - cold 状態にいる者は hot 状態にいる者とくらべ、衝動的な行動をネガティブに評価
- ・ これらの指摘を鑑みると、共感ギャップはネガティブな社会的評価を増幅させるといえる
 - 特に感情を伴う過去の(克服)経験は他者の否定的評価につながりがち
 - 自分が克服したという知識と感情経験の不完全な記憶の結びつきが、他者の衝動的行動をより否定的に評価することにつながる
 - ◇ 例. 私は禁煙できた(どれだけ辛かったかは思い出せない)のに、なぜあなたはできないの？

Ruttan, McDonnell, & Nordgren (2015)

- ◇ 感情的に苦労した出来事（例. いじめ）の過去経験がある者は、その経験に対する衝動的な行動（例. 怒りに任せた不当な行動）を厳しく評価
- ◇ 評価の厳しさは、その経験の克服を難しく思うかどうかによって調整
- ◇ 更に、この傾向は人々に理解されづらく、経験者はそうでない人よりスティグマ化をしづらいと考えられていた
 - 経験者の方が優しい励ましやアドバイスをしてくれない可能性がある

Contemporary and future questions (p.237)

- ・ 共感ギャップはさまざまな分野に展開できそうだが、特に調整要因、文脈要因やネガティブな影響への対抗手段の解明が望まれる

調整要因と文脈の影響

- ・ 共感ギャップは自己中心的な投影から生じると考えられている
 - 他者の嗜好や態度、行動を予測する際に自分自身の経験を始点として、知覚される自他の差に応じてそれを調整する(Epley, Keysar, Van Boven, & Gilovich, 2004; Van Boven & Loewenstein, 2003)
 - 自分と似ていない相手には自己予測の情動的な価値が低いと感じられるため、投影は生じにくい(cf. Ames, 2004)

O'Brien & Ellsworth (2012)

- ◇ 大学校舎の外 or 内で、大学生が山で遭難したシナリオを読ませ、その学生が空腹、渇き、寒さのどれにもっとも苦しむかを予想させた
- ◇ 主人公の大学生の政治的志向が参加者と重なっている場合に共感ギャップが現れ、校舎の外で回答した参加者の方が”主人公が寒さに苦しむ”と答えた。
- ◇ 政治的思考が重なっていない場合には共感ギャップは見られなかった

- ・ 文化的文脈も共感ギャップに影響するかもしれない
 - 集団主義文化の人々は個人主義文化の人々より他者を自己概念に含めやすく、文脈の影響に自覚的であるため、自己予測に頼らずに自他の差を考慮できるかもしれない (Markus & Kitayama, 1991; Heine, Lehman, Markus, & Kitayama, 1999, Wu & Keysar, 2007)
- ・ 個人の行動だけでなく、集団や組織の行動の予測や判断においても共感ギャップが見られるかも今後の検討課題
 - 集団について考えるときには確率などの異なる情報が手がかりとなる(Waytz & Young, 2012; Wildschut, Pinter, Vevea, Insko, & Schopler, 2003)
 - 個人を予測するには情動のような個人レベルの影響を重視するのに対して、集団の行動を予測するには社会的規範や集団の同調圧力などが考慮される(Critcher & Dunning, 2013)

共感ギャップの克服

- ・ 欲求は個人の目標達成の障害となるため、その否定的影響を抑える要因を探すことも今後の重要な課題
 - 認知的資源の確保は役に立たず、かえって否定的な影響をもたらす危険がある(see Nordgren & Chou, 2013; Van Dillen, Papies, & Hoffman, 2013)
- ・ 感情状態のネガティブな影響を別の感情状態をぶつけることで緩和できるかもしれない
 - 魅力的な食べ物への渴望に苦しい思いをしている人は、太った自分を鮮明に想像することで感じる嫌悪や恥でそれを乗り越えられるかもしれない
 - この方法は説得分野では **matching** として知られている
 - ◇ 感情に基づく態度には感情的な手段の説得が効果的(e.g., Fabrigar & Petty, 1999; Petty & Wegner, 1998)
- ・ **Cold** 状態の自分が **hot** 状態の自分から学べず、自分が欲求をコントロールできる能力を過大視することも問題
 - 欲求を経験している最中の苦労を、後でふりかえり自覚できるようにしておく（たとえば耐えているときに頭に浮かんだことを書きとめる）ことも重要
 - 人が衝動の影響力をいつも過少視することを伝えることも重要。これは断酒会で行われる第一段階とも一貫（自分がアルコールに対して無力であることを認める）

Conclusion

- ・ 欲求は日常生活で中心的な役割を果たしているが、今の自分にそれがなければ、その欲求が自分や他人の行動にどう影響するかは非常に想像しづらい。本章ではこの **hot-cold** 共感ギャップが欲求にかかわる知覚や評価、意思決定をどれほど難しくしているかを示してきた。共感ギャップの理解をより深めていくことで、人々がこうした困難を乗り越え、より望ましい行動や意思決定を下せるようになると考えられる。

コメント；

1) Cold-to-hot 共感ギャップと感情予測バイアスの関係は？

- **Cold-to-hot** 共感ギャップ：Cold のときは hot の強さをうまく予測できない⇒予測<実際
- 感情予測バイアス：感情は予測しているほど強く（長く）ならない⇒予測>実際
 - 感情予測バイアスは予測される感情そのものの強さや持続性の正確性に関するゆがみで、共感ギャップは感情の影響に関する予測のゆがみと考える？

2) 物語に対する感情反応と共感ギャップの関係は？

- 質の高い物語を読んでいるとき(cold)に、現実に近いようなリアルな感情(hot)を覚えるが、その予測はずれている（共感ギャップ）
 - 共感ギャップが生じているときには文脈情報が不足している？
 - 物語読解時の感情はリアルに感じられても質的に現実とは異なる？